## 小金井農業のあゆみ

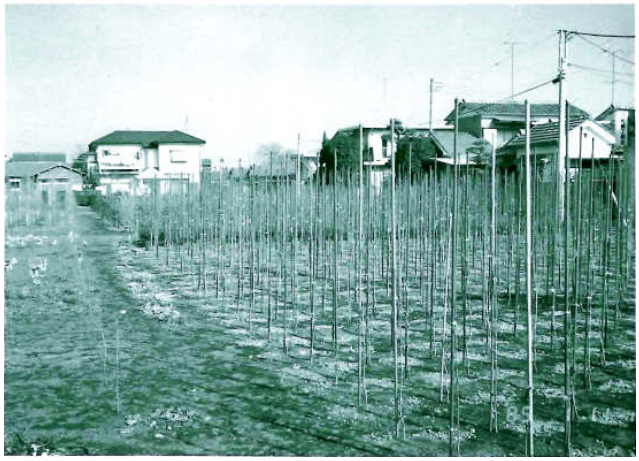
～都市化が進む中での小金井農業の転換②～

### 植木

昭和40年、東京都下における植木の作付面積は369ha、その60％以上が小金井を含む北多摩地区に集中していました。 小金井に植木類の栽培が浸透したのは関東大震災以降です。 昭和初期に隣接する地域の住宅化が進むにつれ、 植木の需要が増大し、庭木用の「幹もの」が多く栽培されるようになりました。戦中は食糧増産時代でもあったことから受難の時代となりますが、畑の隅で高級品の苗木を維持していた大規模経営者もいました。戦後に入ると苗木を維持してきた農家を中心に植木が息を吹き返し、 拡大していきます。

小金井は東京都で最も早く植木の生産者団体として、農協の下部組織である「苗木生産振興会」を組織しました。やがて、「東京の安行」といわれるようにもなり、 昭和40年代では組合員も66人となりその８割以上が「仲間売り」といわれる問屋を兼ねた生産者で、 自家生産ばかりでなく、他家の生産した植木も買い集め、小売業や造園業者、デパートなどに降ろしていました。その後も住宅化の急速な進行、東京オリンピック、大阪万博、皇太子殿下のご成婚（現天皇）等があり、植木はさらに拡大していきます。

近年では、小規模住宅が多くなり、植栽も制限されていることと、都市化の進展に伴う、高地価、高労賃の下で生産を続けるのが困難になり、苗木栽培を周辺地域へ委託しています。植木生産者は技術を磨く中、付加価値の高い造園業へと転向を図る方々と農業経営のあり方を模索する方々が多く見受けられます。



当時の苗木畑

当時の植木畑

ガラス温室

### 花卉

小金井で本格的な花卉栽培を始めたのは、昭和41年頃であるといわれています。 ガラス温室またはビニールで覆われたフレームで花卉各種の鉢物の栽培を行い、後には武蔵小金井駅北口の花卉販売店でその花の販売を行なっています。その後2～3戸の農家が「農業近代資金」を活用してガラス温室を建設し、 サクラソウ、シクラメン、ベコニア、 サイネリアなどの草花の生産を始めているところです。 これらの農家では、ほとんどが兼業農家で、 宅地内に店舗を構えながら盆栽、苗物の販売に力を入れています。 梶野町にはカトレアなど各種洋らんを栽培し、市場出荷を中心とする農家もありました。

花卉園は緑地帯の役割にも担い、 都市的生活環境上も好ましい作物とされ、 都市化のすすむ小金井において発展の道を歩むこととなります。